慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

慶應義塾大学病院
信濃町駅前・各種診療
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝(3353)1211(大代表)

# 新執行部発足

10月1日より、医学部・病院とも新しい執行部がスタートした。3期目となる末松誠医学部長、2期目となる武田純三病院長のもと、医学部・病院のさらなる発展を担う新執行部が発足した。医学部は大学院医学研究科委員長が1名と医学部長補佐3名、病院は副病院長5名での体制となる。

【この度就任した研究科委員長・医学部長補佐・副病院長からの抱負は2面に掲載】

医学部長

医化学教授
末松　誠（62回）

大学院医学研究科委員長

生理学教授
岡野　栄之（62回）

医学部長補佐

循環器内科教授
福田　恵一（62回）

医学部長補佐

病理学教授
坂元　亨宇（64回）

医学部長補佐

麻酔科教授
武田　純三（52回）

病院長



リウマチ内科教授
竹内　勤（52回）

副病院長

血液内科教授
岡本真一郎（58回）

副病院長

小児科教授
高橋　孝雄（61回）

副病院長

皮膚科教授
天谷　雅行（64回）

副病院長

一般消化器外科教授
北川　雄光（65回）

副病院長

看護部長
鎮目美代子

# 第22期日本学術会議始動

## 第2部（生命科学系）会員に三四会員4名が就任

### 臨床医学分野

幕内　博康君（49回）

戸山　芳昭君（54回）

### 基礎医学分野

廣橋　説雄君（53回）

須田　年生君（53相当）

日本学術会議は、科学が文化国家の基礎であるという考えの下、行政や産業及び国民生活に科学を反映、浸透させることを目的に、昭和24年（1949年）1月、政府から独立して職務を行う内閣総理大臣所轄の「特別機関」として設立された。その後、学術会議は1997年12月に行政改革会議で総理府から総務省への移管が決まり、同時に総合科学技術会議でそのあり方が審議された。2003年2月にその意見具申を受け、2004年に法改正が行われている。この改革は当時の学術会議会長であった黒川清氏が中心となって進められ、2005年10月1日に新たな学術会議として生まれ変わり、現在に至っている。新生なった学術会議は、従来の体制と異なり、70歳定年制を導入したり、女性会員の比率を高める方針を打ち出し、同時に幹事会、各種委員会なども再編されて、分野も従来の7部から3部（第1部＝人文・社会科学系、第2部＝生命科学系、第3部＝理学・工学系）に集約された。各部にはそれぞれ部会長、副部会長、幹事が置かれ、会員の選考方法も大幅に変更されている。本会員の任期は原則6年で、3年毎にほぼ半数が改選される形式をとっている。

本学術会議の職務は、1）科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること、2）科学に関する研究の連携を図り、その能率を向上させること、とされている。そして、この会議体は我が国の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の各分野で活躍している約84万人の科学者を代表する機関であり、210名の会員と約2000名の連携会員により構成され、前述の目的に沿って職務が遂行されている。そして、その役割として、1）政府に対する政策提言、2）国際的な活動、3）科学者間のネットワーク構築、4）科学の役割についての啓発活動、の4つが挙げられている。

前期（第21期）は第2部臨床医学分野の金澤一郎氏（宮内庁長官官房皇室医務主管）が会長を務め、金澤氏の定年退任後は副会長であった第1部法学分野の広渡清吾氏（専修大学法学部教授）が後任として会長職を引き継いできた。今回も会員の半数が改選となり、残り半数の継続会員を含めた定数210名体制で、この10月1日より新たに第22期日本学術会議がスタートした。医学は第2部生命科学系に所属し、継続と新規会員を合わせ臨床医学分野から17名、基礎医学分野から15名が選考委員会で選出された。この第2部には、医学以外に薬学、歯学、基礎生物学、健康・生活科学、農学、食料科学が含まれ、総勢67名の体制である。前期（第21期）では、三四会員から第2部の臨床医学分野に北島政樹君（外45回：国際医療福祉大学学長）〈平成23年8月定年退任〉と幕内博康君（外49回：東海大学理事・東海大学医学部付属病院本部長）〈平成23年8月就任〉が、同じく基礎医学分野に御子柴克彦君（生理48回：理化学研究所脳科学総合研究センターグループディレクター）と廣橋説雄君（病理53回：医学部特任教授、前国立がんセンター総長）が会員として活躍してきた。今回の第22期では北島君と御子柴君が定年ないし任期退任となり、第2部継続会員の幕内君と廣橋君に加え、新規会員として臨床医学分野に戸山芳昭君（整54回：慶應義塾常任理事、医学部教授）、基礎医学分野に須田年生君（発生分化生物53相当：医学部教授）の2名が選考された。ところで、全会員210名の最終学歴ないし現在の所属大学・施設をみると、半数弱がやはり東大系であり、改めて東大の力、総合力の凄さが読み取れる。以下、大きく離されて京大、そして慶大・東北大、九大・東工大、阪大・名大、北大・早大の順となる。

改選された第22期日本学術会議は、早速、10月3～5日に第161回総会を学術会議講堂で開催した。初日昼には任命式が総理大臣官邸大ホールで行われ、野田内閣総理大臣より新規会員に任命書が授与された。午後の総会では先ず全会員の投票により会長選挙が行われ、その結果、第22期会長として第3部の大西隆氏（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授、63歳）が選出された。また、同夕刻には懇談会が和やかな雰囲気の中、同じく総理大臣官邸において開催され、野田総理大臣や藤村内閣官房長官、古川科学技術政策担当大臣、細野環境大臣など政府首脳からの挨拶に続き、大西学術会議会長からも就任の挨拶と今後の抱負が述べられた。総会2日目、3日目には各部会や地区会議、幹事会、分野別委員会、機能別委員会などが予定通り行われ、第2部生命科学系の幹事に須田君が任命された。第22期学術会議の今後の活躍、そして成果を大いに期待したい。

さて、3・11後の日本の現状はあらゆる面で極めて厳しい状況下に置かれているが、東日本の復旧復興を含め、安全・安心で豊かな国造りを支えるのは「科学」の力、進歩にあることは言うまでもない。今後、資源の少ない日本が「科学」の力により世界を先導する役割を演じるためにも、学術会議の存在意義は極めて大きい。この学術会議会員に三四会員から4名選出されたことは大変名誉なことであり、この4名の方々には、日本の「学術」「科学」発展のため大いに活躍し、貢献されることを願っている。また、本件とは別に、この10月1日より、日本の学術研究助成や研究者養成のための資金支給、学術に関する国際交流などの事業を推進し、人文・社会科学から自然科学にわたる研究者の知的創造活動を総合的に支援してきた我が国唯一の独立した資金配分機関（ファンディングエージェンシー）である日本学術振興会の理事長に前慶應義塾長・安西祐一郎氏が就任（任期4年）したことを合わせてお知らせする。

## 初期臨床研修医の研修環境の充実を目指して

### 念願の研修医ラウンジがオープン！

「研修医ラウンジ」が、東日本震災等の影響で当初の予定から約半年ほど遅れたものの、7号棟地下1階の卒後臨床研修センター事務室の向い（旧RI管理室）に完成し、9月6日（火）午後5時に開所式が執り行われた。開所式には、研修医、指導医をはじめ、医学部・病院関係者が出席する中、末松医学部長、武田病院長、平形卒後臨床研修センター長から、「狭いスペースであるが、研修医がこのラウンジを生かし、充実した臨床研修を行ってほしい。医学部、病院は引き続き、研修環境を充実したい。」という挨拶の後、各部屋が内覧された。「研修医ラウンジ」は、ラウンジ1（学習スペース16席）、ラウンジ2（情報交換や休憩など多目的利用ソファ16席）、センター長室（会議、面談、研修医の勉強会・抄読会に使用）から構成され、教育研究ネットワークにアクセス可能な無線LAN、共用のプリンター兼コピー機器、冷蔵庫、研修医72人分の収納スペースが設置されている。

研修医ラウンジ1

研修医が、このラウンジをフルに活用し、自らの「理想とする医師」を目指して研鑽を積み、将来の医学・医療を担う医師として活躍することを願っている。

現在、オープンから約1か月が経過し、初期臨床研修医を代表して西野誠医師（慶應義塾大学病院初期臨床研修プログラムB）のメッセージを紹介する。

「平成16年から必修化された初期臨床研修制度も今年で8年が経ちました。PMET（財団法人医療研修推進財団）による研修病院プロファイルのデータベースには、学会認定指導医数、入院患者数、平均在院日数、年間の救急車受入数の他に、『研修医室があるか』などの研修環境についても、記載されています。

慶應義塾大学病院の初期臨床研修体制の特徴としては、各分野のスペシャリストの先生から学べるランチョンセミナー、豊富な医療情報をもつメディアセンター、国内でも先駆けて作られた臨床手技を学ぶクリニカル・シミュレーションラボ、敷地内に併設の研修医白梅寮、研修全体を管理する卒後臨床研修センターなどがあげられますが、この度、待望の研修医室が完成しました。

研修医室は、研修医一年目を過ごした国家公務員共済組合連合会立川病院でも大きな存在でした。それは研修医室が2つの役割（(1)ベッドサイドで患者さんから学んだことにつき今後のマネージメントを看護師などのコメディカルと相談、さらに指導医からのフィードバックを振り返る場、(2)論文や成書にあたる自習の場所というだけでなく、目線の近い2年目研修医の先輩から臨床実施のアドバイスを頂く場、同期の研修医同士と症例や知識を共有する場）を果たしていたからです。

慶應義塾大学病院で初期研修する、計96人の初期臨床研修医それぞれが日々の臨床研修をより充実したものにできる場として、この研修医室をうまく活用していけるようご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

（初期臨床研修医　西野誠　88回）」

（卒後臨床研修センター長　平形　道人　62回）

研修医ラウンジ2

卒後臨床研修センター長室

## 第16回慶應医学賞授賞式・受賞記念講演会

本年の慶應医学賞受賞者は、田中啓二博士（財団法人東京都医学総合研究所所長）、Philip A. Beachy博士（スタンフォード大学教授、HHMI研究員）の2名に決定し、授賞式・受賞記念講演会を下記のとおり執り行う運びとなりました。
皆様是非ご参加下さいますようお願い申し上げます。
なお、受賞記念講演会は一般の方・研究者・学生を対象に行います。

**授賞式・受賞記念講演会**
日時：2011年12月6日(火)午後2時～午後5時30分
会場：北里記念医学図書館2階　北里講堂
言語：日本語・英語
（同時通訳有り）

なお、受賞者の講演は質疑応答を含め、各70分を予定しております。

慶應義塾は、1996年から医学・生命科学の領域において顕著かつ創造的な業績を挙げた研究者を顕彰してきました。過去には、本賞受賞者からノーベル賞受賞者を6名輩出しており、国内の大学において他に類を見ない顕彰制度です。

問い合わせ先：慶應義塾医学振興基金事務室
Tel: (03)5363-3609(直通)
Ext: 62377
E-mail: k-msf@adst.keio.ac.jp
URL: http://www.ms-fund.keio.ac.jp/prize/index-j.html

## 鑑賞知来

〝菅直人とは何者だったのか？〟菅首相は1年3カ月の任期を終えた。小泉後、安倍、麻生、福田、鳩山各首相は皆在任1年以下の首相で、菅も3・11後は猛烈な批判にさらされて鳩山並みの短命に終わりそうでいながら小泉後では最長の在任期間になった。

結果的には3・11後の混乱の中、半年間は菅直人が日本の中心点にいたことになる。私は政治には関心が薄い人間だが、歴代首相がマスコミの批判にさらされただけで大人に怒られた幼児のように政権を投げ出す姿が繰り返されるのを好ましくは思わなかった。菅直人も結局任期を待たずに政権を投げ出したわけであるが、批判にさらされながら3・11後の混乱の中、少なくとも半年間は日本の中心点を固定する役割を果たした。何と低いレベルで評価をしなければならないのだろうと情けなくもなるが、逆に3・11直後の混乱のなかで首相が政権を投げ出すようなことがあれば一体どうなっていただろうかと背筋が寒くなる。本来、政治家にとって、批判にさらされながらも己が正しいと信じる事を貫き成し遂げようという〝良心〟をもつことがその最低限の資質なのではないか。そういう政治家を育てるための我々の資質も問われている。9・11後にあれほどに不明な大統領を皆で盛りたてたアメリカ国民と今回自国の危機の中で非創造的批判を繰り返した我々のどちらがより（同様に不幸ではあるが）建設的であったか。

菅直人が3・11後少なくとも半年間は日本の中心点を固定する役割を果たしたことは評価したい。同時に、〝何かを行ってほしかった〟とも強く思うが、それは終わったことだ。後年この時期を肯定的にふり返り得るように、野田首相には頑張ってほしいと切に願う。同時に、われわれ一人ひとりが、3・11の直後に思ったように、自分の目の前にある問題を一つずつ解決しながらできることをやって行き、日本の未来を切り開いてゆけることを心から祈っている。

（藤田保健衛生大学医学部一般消化器外科　守瀬善一　66回）